

『階上都市』を上梓した阿部寧氏



2011年8月11日に発生した東日本大震災では巨大津波が各地を襲い、被害を拡大した。人命をどう津波から守ればいいのか。そうした命題に挑戦したが、『階上都市』を出版した阿部寧氏は建築・街づくり支援センター理事長。職住機能と防災機能を併せ持つ高層ビルによる立体的な「階上都市」の発想は、津波到来時には「横ではなく縦へ逃げろ」との持論から生まれた。大震災から6年、本書を通じて忘れ去られようとする津波に対する人々の記憶の風化に警鐘を鳴らす。

長年の経験から「階上都市」構想

阿部氏が津波から逃げるのに「横ではなく縦へ逃げる」と直観的に気づいたのは、巨大津波で家屋が次々と流されていくテレビの映像だ。「そこから『階上都市』構想までいくには時間がかかったが、長年、建築や街づくりに関わってきたことが役立った」

阿部氏は建築を学び、梓設計に入社。入社6年目にイタリアへ。当時、イタリアは建築を含めデザイン全般に活気があった。復職すると創業者清田文永氏がつくった「国際開発コンサルタンツ」に8年間出向する。各分野のエキスパートを集めた地域計画、都市計画、団地計画のシンクタンクで、当時どこよりも先進的な組織だ。「階上都市」が幅広く柔軟な視点で書かれ、その結論に至るまでの論理構築が緻密で説得力があるのはそうした背景がある。

エコ・スーパーユニット建築

阿部氏による被災地復興のための階上都市構想は「職住を分離した高層移転や海の見えない巨大堤防では故郷の再生はない」との決意から生まれた人命本位の立体的な街づくりだ。

階上都市の要は「エコ・スーパーユニット建築」と呼ぶRC造のスケルトン・インフィルの建築物

津波から逃げるには横よりは縦(上)へ人命第一の街づくりを

だ。建築物構造体(スケルトン)は、梁・床などの骨組みと内装・設備(インフィル)に分け、構造体はそのままにして内装・設備を更新できるため、住み方は個人の自由。例えば、地上5階までを業務・店舗スペース、その上部から40〜50階までを住居スペースのイメージという。低層部は商業関係者などが利用するため、これまでと同じ職住近接の環境を生み出す。5階レベルには高層道路などを配置すれば街が形成される。阿部氏は「エコ・スーパーユニットはミニ・コンパクトシティ」と話す。

「大事なことは人命が第一で、とにかく上(縦)に逃げること。地上階から5階までの避難時間は階段のステップ1段当たりの移動時間が1〜2秒(高齢者、幼児、途中休息を想定)のため健康者で2・5分、身体障害者も5分で済む」。

少しでも社会貢献を

阿部氏が本書を通じて思ったきっかけは「NPOとしての社会貢献」という。

日本の地震高断層の実態を考えると、大小問わず津波がいつ発生してもおかしくない。「津波の恐ろしさを忘れてはいけない。忘却は罪悪だ」と強調する。日本に限らず、東南アジアの人々も同じ状況にあると感じ、書名に「The Elevated Town: High Rise Living in Tsunami Region」と英文を併記した。

「階上都市は人命救助、個人と公共資産の確保、ガレキを発生させない時代の変化に対応したヒューマン・スケールの持続可能な街づくり、縦に逃げる意識の徹底、教訓をいつまでも忘れないことなど、復興のための考え方を提案した基本論(概念)。何より命を大事にしてほしいと願う。それが今世紀に生きる私たちの使命だと思う」。



『階上都市』津波被災地を救う街づくり 三和書房 定価2600円税別